

青森は江戸時代の初めに開港された港町だが、それ以前からこの場所には蜆貝村と善知鳥村の二つの漁村が存在していた。これらの村は青森町の成立と共に町の中に取り込まれることとなつたが、幕末に至るまでどちらも漁師の住む町として、陸奥湾で獲れる海産物

を青森町内や弘前方面に供給していた。

明治に入ると、陸奥湾内の沿岸漁業に加え、青森を根拠地として北海道から樺太、千島方面に向けて漁船が出漁するようになつた。さらに日露戦争以降、樺太、カムチャツカ方面の北洋での漁業権が拡大されると、

これらの海産物を受け入れる魚市場は、先に述べた安方に開設されていた。このうち、蜆貝の魚市場では漁師町の伝統を持つ蜆貝と

樺太と千島方面からの海産物もストップし、安方魚市場はその活気を失うことなくそのまま廃止された。

昭和27年（1952）に至り、それまで日本漁船の操業海域を制限し

ていたマツカーサーラインが撤廃された。それを待つて北洋漁業が再開されると、早速青森からも独航船が出漁し、昭和29年には青森県

の漁業者による船団も北洋へと派遣され、魚市場も戦前のような賑わいを取り戻すこととなつた。

しかし、昭和31年に日ソはいけないと思う。

青森には北海道や樺太方面からの漁獲物が大量に水揚げされている。大正時代中期から第二次世界大戦の頃には、日本を代表する魚の集散地の一つとして数えられるに至つたのである。

だが、第二次世界大戦の敗戦によつて、北洋での漁業が中断を余儀なくされ、

そこで、青森港の港湾整備の一環として、施設の老朽化が進んでいた安方魚市場は、昭和47年に卸町に開設された青森市中央卸売市場へと移転した。また、漁港そのものも堤川の東に移転したことでの陸奥湾や北洋で漁獲された海産物の大集積地であった安方魚市場は、完全にその役目を終えることとなつた。

北洋漁業は再び縮小に向かつた。さらに、昭和52年からは世界的に200カイリの排他的漁業水域を設定する国が広がり、北洋漁業は壊滅的な打撃を受けることとなつたのである。



昭和30年代の安方市場  
(県史編さんグループ所蔵)

## 北洋の海産物の集積地

### — 安方魚市場 —

石塚 雄士

（青森県青少年・男女共同参画課）

主に沿岸の漁業者が水揚げする魚が扱われていた。これに対し、安方の市場では沿岸ものに加え、北洋方面から持ち込まれる海産物が扱われていた。これは、北洋方面から船で持ち込まれる海産物が陸揚げされる浜町桟橋に近かつたことが理由だった。その後、明治24年（1891）に東北線、同29年に奥羽線が開通し、

東京や関西方面に向けて鮮魚を大量に発送することが出来るようになると、駅に近い安方魚市場はさらに発展することになった。

明治に入ると、陸奥湾内の沿岸漁業に加え、青森を根拠地として北海道から樺太、千島方面に向けて漁船が出漁するようになつた。さらに日露戦争以降、樺太、カムチャツカ方面の北洋での漁業権が拡大されると、これらの海産物を受け入れる魚市場は、先に述べた安方に開設されていた。このうち、蜆貝の魚市場では漁師町の伝統を持つ蜆貝と樺太と千島方面からの海産物もストップし、安方魚市場はその活気を失うことなくそのまま廃止された。

昭和27年（1952）に至り、それまで日本漁船の操業海域を制限していたマツカーサーラインが撤廃された。それを待つて北洋漁業が再開されると、早速青森からも独航船が出漁し、昭和29年には青森県の漁業者による船団も北洋へと派遣され、魚市場も戦前のような賑わいを取り戻すこととなつた。

しかし、昭和31年に日ソはいけないと思う。

しかしながら、昭和31年に日ソはいけないと思う。